

世界批評大系 5

世界批評大系 5

小説の冒険

筑摩書房

世界批評大系 小説の冒険

一九七四年八月二十日初版第一刷発行

1398-2809-4604

発行者 井上達三 発行所 株式会社筑摩書房

〒東京都千代田区神田小川町二丁目八 電話二九一七六五一 振替東京四二二三

井村印刷／明和印刷 和田製本

第五卷目次

マルセル・ブルースト	清水徹訳	3
サントロブルーヴとバルザック		
ヴァージニア・ウルフ	大沢実訳	
現代小説		16
ローベルト・ムージル	城山良彦訳	
カフカとヴァルザー		24
*		
ジャック・リヴィエール	渡辺一民訳	
冒険小説論		29
ジョン・ミドルトン・マリ	鈴木建三訳	
小説の崩壊		63
アルベール・ティボージェ	菅野昭正訳	
小説の構成		76
*		
パンジャマン・クレミユ	保刈瑞穂訳	
マルセル・ブルースト		87
エルンスト・ローベルト・クルティウス	巴子修平訳	
マルセル・ブルースト		128

テズモンド・マカーシー 小池滋訳

ブルーストの余白に

*

D・H・ロレンス 金関寿夫訳

土地の精神

オルダス・ハックスリー 鈴木寧訳

D・H・ロレンス

アンドレ・マルロー 滝田文彦訳

仏訳『チャタレイ夫人の恋人』への序文

*

レフ・シェストフ 河上徹太郎訳

アントン・チェーホフ

エヴゲーニイ・ザミャーチン 川端香男里訳

チェーホフ

レナート・ボッジョーリ 土岐恒二訳

イワン・ブーニンの芸術

ライオネル・トリリング 出淵博訳

イサーク・バーベリ

*

アンドレ・ジッド 若林真訳

十冊のフランス小説

307

289

265

259

231

227

205

197

184

シャルル・デュ・ボス 清水徹訳

パンジャマン・コンスタンと『アドルフ』

エドウィン・ミューアー 富士川義之訳

ウォルター・スコット

ヘルマン・ヘッセ 古見日嘉訳

ジャン・パウル『ジープンケース』

ミゲル・テ・ウナムーノ 桑名一博訳

ドン・キホーテの墓

*

マルカム・カウリー 宮本陽吉訳

けがれなき、失われた時代

E・M・フォースター 井出弘之訳

シンクレア・ルイス

エドモンド・ウィルスン 金関寿夫訳

ヘミングウェイ・志気の圧力計

*

ジャン・ポール・サルトル 小林正訳

フランソワ・モーリヤック氏と自由

グレアム・グリーン 丸谷才一訳

『ブライトン・ロック』序文

ジョージ・オーウェル 中川敏訳
鯨のなか

*

解説 丸谷才一

訳文中の割註のうち（ ）は原註、〔 〕は訳註を示す。

マルセル・ブルースト 清水徹訳

サント＝ブーヴとバルザック

サント＝ブーヴの見誤った同時代作家のひとりがバルザックです。おや、眉をひそめられましたね。知ってますよ、あなたはバルザックがお好きでない。〔母親との対話という体裁で〕「書かれてはいるのである」そういうあなたのお考えがすっかり間違っているわけじゃありません。彼の抱いたさまざまな感情の卑俗さといったらひどいもので、生涯かかってでもそれを高めることができなかった。彼はこの上なく低級な野心の満足を人生の目的と考えていた、すくなくともそういう目的と、もっと上品ないろいろな目的とをまったく混ぜ合わせていたのです、それらを分けて考えることはほとんど不可能なほどだったのですが、それはなにもラステイニャックがバリの世界に乗り出す年齢のころだけではなかったのです。死の一年前、彼の生涯をかけての愛がいままさに実現しようとし、十六年来愛していたハンスカ夫人と間もなく結婚できるというころ、彼はその結婚について妹にこんな言葉で語っています。「そうなんだ、ロール、好きなときに自分のサロンを開放して、そこに社交界のエリートを集める、人びとが集ってきてみると、名家の生まれで、礼儀正しく、女王様みたいに堂々として、あちこちの最高の名門とつながりがあり、才気に富み、教養が高く、

美しい女性が迎えてくれる、そういうのはバリではなかなか大したことなんだ……。仕方がないじゃないか、私にとって、いまやらねばならぬことというのは、感情をぬきにしていつて（不成功に終れば私は精神的に死んでしまうだろう）、すべてが無か、一か八かの仕事なんだ……。心情も精神も野心も、私のうちにあって、私が十六年来追いつづけているものとはちがうものをのぞんでなどいないもし、この広大な幸福を取り逃すようなことでもあれば、私にはもうなんにも要らない。私が贅沢を好んでいるなどと思っていけない。フォルチュネ街の贅沢には付き物がいろいろとある、——生まれのいい女性がゆつたりと暮して、縁故・交友関係もこの上なく立派なひとたちばかりだ——そういうのを全部ひっくるめたものを私は好んでいるのだ。〔バルザックはハンスカ夫人と結婚して住むためパリ凱旋門に近い、世にもばかげた出費を〕「（このフォルチュネ街（現在のバルザック街）に大きな家を買重ねてそこを飾りたてた）」「同じ一八四九年三月二十二日付の妹宛手紙の」ちがう条りで、彼はまた彼女を「（財産は別の話にして）社会的に有利な地歩というこの上なく貴重なものを身につけているひと」という言葉で語っています。こんなことを知ったあとでは、『谷間のゆり』のなかで以下のような条りを読んでも驚くことはで

きません、——『谷間のゆり』のなかで、バルザックのすぐれて理想、といふところの女性、『天使』モルソー夫人は、愛する男というか愛し児フェリックス・ド・ヴァンドネスに手紙を書き、その手紙の想い出はフェリックスにはいつまでも神聖なものとして残るため、それから何年もあとになってからもフェリックスはその手紙について「それこそ夜の静寂のなかに響きわたったすばらしい声、すつくと立ち上がって本道の道を指示してくれた崇高なる姿だった」と言うほどなのですが、その手紙で夫人は、成功の仕方のみならず、またしそいってても誠実に、キリスト教徒としてふさわしく成功する仕方です。バルザックが、自分は聖女の姿を描きだすべきなのだと知っているからです。でも、聖女の眼にも社会的成功は崇高な目的と映る、そうではないなどとは彼には信じられません。やがて彼は、妹や姪たちに向って、彼の愛している女性のようなすばらしいひとと親密にしていれば、いろいろと恩恵があるのだと自慢してみせることになりますが、その手紙のなかで、このすばらしい女性はおまえたちに完璧さというものを伝えてくれるだろうとバルザックの言っているその完璧さとはなにかなるかというところ、何枚かの劇場入場券「イタリヤ座、オペラ座、オペラ・コミック座の座席」を数に入れないければ、ふたりの年齢や境遇などの差を際立たせ、それを保ってゆくすべを心得ているという、ある種の貴族的な挙措態度なのです。また、『ゴリオ爺さん』のなかで「叔母のボーセアン夫人に夢中になるラスティニャックは、彼女に向って『あなたにはばくのためにいろいろなことをして下さることのできる方です』と打明けますが、この言葉に悪意はすこしもこめられていません。ボーセアン夫人はこの言葉にすこし

も驚かず、微笑むのです。

ばくはバルザックの言語の下品さの話をしているわけじゃない。バルザックの言語の下品さといったらばなはだしいもので、彼の語彙を腐蝕し、この上なくくだけた会話のなかでも疵になるような言い回しを彼に使わせてしまうほどです。「……」そして、この下品さを隠そうと思うたびに、彼は、たとえばぞっとするほど肥った相場師がブローニュの森に馬車を走らせているときの、気取って指を額に押しあてたあの感傷的なポーズのような、下品なひとだとなすぐにわかってしまうところを見せてしまうのです。そういうとき彼は「親しいひとよ」と言ったり、いや同じことを「カラ」とイタリヤ語で書いたり、さやならと書くかわりに「アディオ」と書いてり……。『バルザックは手紙のなかでよく「カラ」』

あなたは書簡集に見られるいくつかの面でフロールを下品だとお考えになったことがときどきありました。でも、彼フロールにはすくなくともバルザックのような下品さはすこしもなかった。作家生活の目的は作品のなかにあり、それ以外はただ「幻しを描出するのに使われるためにのみ」〔ルイ・ブリエュ「最」存在するのだと、彼が理解していたからです。バルザックは実人生の勝利と文学の勝利とをまったく同じ面上に置いてしまう。「私は『人間喜劇』によって偉大ではないかもしれないが」と、彼は妹に書いています。「この成功によって偉大となるだろう」と。（成功とはハンスカ夫人との結婚に成功したことです）

でもね、お母さん、この下品さそれ自体が、たぶん、彼の描写のあるいくつかのものの力強さの原因となっているのです。下品な動機など認めたくない、それを断罪し、浄化してしまうというのは、

まさしく心の高尚さ以外のなにものでもありませんが、ぼくらのうちでそういう高尚さの認められるひとたちのなかにも、実際には、下品な動機が変貌したかたちで存在しうるのです。とにかく、野心家がたとえ理想の愛を抱こうと——たとえその愛において野心的なささまざまな考えを変貌させていないにせよ——、残念なことに、その愛は彼の生涯をつらぬくものではなく、多くの場合、彼の青春のよりよい一瞬間にすぎません。自己のなかのそういう部分だけでもって一冊の書物を書く作家があります。でも、ある部分が完全に締めだされている。ですから、ラスティニャックの優しい愛や、ヴァンドネスの優しい愛を見て、しかもそのラスティニャック、そのヴァンドネスが打算と野心とからなる生涯を送った冷ややかな野心家であり、彼らの生涯において彼らの青春のこの小説は（そうです、それはバルザックの小説というより、むしろほとんどこの人物たちの青春の小説といったほうがいいものです）忘れられていて、彼らは微笑しながら、本当に忘れてしまったひとつのような微笑を浮かべながら、その小説を回想するにすぎず、その小説のなかでは他の人物たちはもちろん愛の主役であったものさえ、モルソー夫人との恋愛事件をまるで任意の恋愛事件のように語り、その恋愛事件が自分たちの生涯をその想い出でもって充たすことはなかったことと口にして悲しみもしていない、そんなありさまを知るとき、ぼくらにはなんとという真実の力を見出すことでしょう！世界と経験とに則した人生——というのはつまり、愛などというのは持続しないもので、青春の誤謬にすぎず、野心と肉欲とがそこにははっきりと関係していて、そんなものは結局いつかはやがて大したものとも思えなくなるだろう、等々とわかっているような人生という意味ですが、——

そういう人生をこれほど感じさせ、もっとも理想的な感情でさえ、野心家が自分の野心を自分自身のために変貌させるための一箇のプリズムにすぎないかもしれないことを示しているという点では——野心家は、たぶん自分では意識していないのですが、この上なく感動的なやり方で野心を示すということ、言いかえれば、主観的には、自分自身の眼で見ては、みずから理想的な愛を抱いていると信じている男を、客観的には、この上なく乾いた冒険家だと示すことによって自分の野心を変貌させるのです——、この作家が、あるひとつの人生の幸福の夢の達成を描きだしているのだと信じながら、じつは、そういう夢の達成である結婚の社会的利得をぼくらに語ってしまふほど、それほど下品なやり方で、もっとも高貴な感情を、きわめて自然に、まさしく理解してしまったということ、これはたぶんひとつの特権なのでした、いや本質的な条件そのものでした。ここではバルザックの書簡集と小説とを引きはなす必要はありません。彼にとつて作中人物は実在の人間だったので、グランリュールやウージェニー・グランデにはかくかくの縁談ははたして良縁だろうかと彼はまじめになって議論していたということが、よく語られています、彼の生涯それ自体が、同じようなやり方で彼が絶對的に構築した小説だったのだと言うことができるのです。実生活（ぼくらの意見では現実的だとは考えられない生活）と彼の小説群が生きている生活（作家にとつてただひとつ真実な生活）とのあいだに境界線がなかったのです。ハンスカ夫人との結婚のもたらすいろいろな幸運のことを語っている妹宛の手紙のなかでは、ただたんに、すべてが小説のように構築されているばかりか、あらゆる人物が、ちょうど彼の小説のなかでのように、行動の展開（筋）を明確なら

しめる因子として、設定され、分析され、詳しく述べたてられています。母親が手紙のなかで彼のことを子供扱いするその仕方や、また自分に借金があるばかりか自分の生家も借金を背負っていることが暴露しようものなら、結婚はだめになり、ハンスカ夫人は別の相手を選らんでしまうかもしれないということを妹に示そうと思つて、バルザックは、ちょうど『トゥールの司祭』でするように、一切を詳しく述べたてます。〔……〕また、サルディニヤにある古代ローマ人の銀山採掘跡を発見しようとするための手筈を語りだせば、それは『絶対の探求』そのもののものとなるでしょう。従兄ボンスや『絶対の探求』の「クラースの家具は、彼がフォルチュネ街の家のご自慢の画廊や、『ウクライナ』のヴィエジューホヴニヤにある（ハンスカ夫人の城館の）画廊を描写するとき以上の愛情と現実感と幻想とをもつてしては描写されません。〔……〕自分の所蔵する『マルタ修道会騎士』像について、「これは、ヴァイオリン演奏者とならんで、画廊の太陽ともいふべき輝かしい傑作のひとつです。保存のいいティツィアーノの原画と同じくらい、この絵では一切の調和がとれている。もっとも讃嘆の気持をそそのめるのは、眼利きたちの言い回しを借りれば、なかに本当に人間がいるような服装です……」セバスティアーノ・デル・ピオンボ〔十六世紀イタ〕にはこんなものをつくり上げることができません。とにかくこれはイタリア・ルネッサンス期のもっとも美しい作品のひとつで、ラファエル派のものです。色彩においてはさらに進歩を見せている。ところで、私の所蔵するグルーズ〔十八世紀フラ〕の女性肖像画をごらんにならぬうちは、そう、この世紀のフランス派とはどのようなものであるか、おわかりになりますまい。ある意味では、ルーベンスもレンブラント

もラファエルもティツィアーノも、これほど強烈ではありません。またそれは、この種のものとしては、『マルタ修道会騎士』と同じくらい美しい。グイド・レーニ〔十七世紀イタ〕がまったくカラヴァッジオ風だった時期の、強烈な手法による『曙』が一枚。それはカナレット〔十八世紀イタ〕を想起させますが、それよりずっと壮麗です。それに、すくなくとも私の考えでは、比類のない作品です。〔……この前後には、バルザックの手紙におけるこの種の記述が延々と引用されている。〕

実人生としては空想的にすぎるし、文学としては俗っぽすぎる、中間的な高さにあるこうした現実、彼らが彼の文学のなかで、人生がぼくらにあたえてくれる愉しみとほとんど変らぬ愉しみをし、しばしば味わりように仕向けてくれます。バルザックが、偉大な医師や芸術家たちの名前を引こうとして、實在のひとの名前と彼の書物中の人物たちの名前とをごたませにして引いて、「クロード・ベルナルと、ビシアと、デブランと、ビアンシヨンの天才が彼にあつた」と書くとき〔後のふたりがバルザックの作中人物〕、それはちょうどバノラマ画家たちが作品の前景に現実的な浮き上がりをもった像を描き、それとだまし絵的な書き割りとを混ぜ合わせるようなもので、そこに感じられるのは純然たる幻覚といったものではないのです。

じつにしばしば、彼の作中人物たちは實在の人間のようになるでしょう、實在の人間以上のものとはならぬでしょう。

そんなわけで、ぼくらはバルザックを読みながら、さまざまな情念を感じつつけるでしょうし、また、高度の文学とは情念の圧力からぼくらを癒してくれるものなのですから、ぼくらは情念をほとんど満足させつつけることにもなるでしょう。〔バルザック〕において描写されている大社交界における夜会は、作家の思考によ

って支配されており、それを読むことでぼくらの社交界への関心は、アリストテレス流に言えば浄化されるのです。バルザックでぼくらは、社交界の描写に立会うことで、ほとんど社交界における満足感にひとしいものを味わうのです。

文体とは、作家の思考が現実を変換せしめたしるしなのですから、はっきり言って、バルザックには文体はないということになります。この点で、「しつにしばしば激しやすく、対象を溶かしこんでしまうこの文体は……われわれの巨匠たちの言い方にならっていえば、アジア的で〔ラテン文でキケロ的な文体とは反対〕、ところどころで折れ、古代マイムの身体よりさらにぐにやぐにやしている」と書いたサント＝ブーヴは、まるでまちがってしまっただけです。この判断ほど誤っているものはありません。たとえばフローベールの文体においては、現実のあらゆる部分が、ある同じ実質——さまざまな茫漠とした表面をもち、しかも均一な光にきらめくあるひとつの実質——へと転化しています。不純さはいささかも残っていません。それらの表面はすべて反射し、反映するものとなっているのです。あらゆるものがそこに描きだされるのですが、しかし描きだされるといつても反射し、反映によってであり、均一な実質を変質させることはありません。はじめはたがいにちがうものであった一切が、転化され、吸収されてしまうのです。反対にバルザックのなかには、いまだ存在しないところの、来るべき文体のための一切の要素が、未消化、未変換のまま共存しているのです。この文体は暗示せず、反映もしません。それは説明する文体です。もっとも、イメージの援けを借りて説明するのであり、そのイメージというのが、この上なく心を打つものなのですが、それ以外の部分と溶け合うことがない、――

――ちょうど、相互の和合などまったく気にかけず、相手の言葉に割って入らないようにするというような配慮もすこしもなく天才的な会話をつづけながら、自分の言いたい気持ちを相手にわからせる――ちょうどそんなふうにして、彼の語りたいところを読者にわからせるイメージなのです。書簡集のなかで彼は「いいかね、結婚なんてクリームみたいなもの、温度が変わったり、匂いが漂ってきたりというようなほんの些細なことで変質してしまうんだ」と書いていますが、こういった種類の^{イデオロギ}比喩、つまり目立ち、適切ではありませんが、文全体のなかでは調子ははずれで、暗示するというよりはむしろ説明するような比喩、美と調和という目的にはいささかも従っていない比喩を用いて、彼はこんなふうに書くでしょう。「ド・バルジュン氏がにこりと微笑を投げてくるのは、まるで地下に埋めてあった爆弾が思いだしたように爆発するような具合だ」〔幻滅〕第二〔部第二章〕「その眼は見たところ透明な角膜白斑に覆われているようだった。それはあたかも、汚れた真珠母の青みがかった反映が、蠟燭の光をうけて玉虫のようにきらめいているというかのようなであった」〔ル・ジャック〕「最後に、特徴をひとつ取り上げてこの男を描きだせば――この特徴がいかに価値あるものかは、実業に慣れたひとには解っていただけよう――かれは自分の視線をかくすために青い色眼鏡をかけていた」〔幻滅〕第三〔部第六章〕

彼は、その人物がどんなふうであるかをぼくらに理解させてくれる特徴を見つけたただで満足して、それを美しい全体のなかに溶けこませようとしないうけですが、同じように、彼は的確な例をいろいろと出しはするものの、そうした例から、そこに含まれているかもしれないぬめぬめを取り出そうとはしないのです。（……）

文章というものを、会話や知の目標となるものの一切が呑みこまれ、もはやそれとわからぬものに化してしまはずの特殊な実質からなっているとは考えないで、彼は単語のひとつひとつに、自分がそれについても持っている概念を添わせ、またその概念から思いついた省察を単語に付けたのです。ある芸術家のことを語ると、たちまち彼は、その芸術家について自分の知るところを、単純に接合して語ります。セシャル印刷所〔幻滅〕の冒頭に登場するリムシヤンの親友ダヴィッドの経営する印刷所の話をしていううちに、いまやフランス文明はどうやら議論をする権利を万人に拡張して、個人的思考のたえざる主張の上に基礎を置こうとしている様子だから、そういう文明の要求に紙の質を適応させることが必要だ、——それにしても、フランス文明のこうした傾向はまったく不幸なことだ、討論にうつつをぬかす国民はあまり行動はしないものだから、等々、というような話になるのです。そして彼は、こんなふうにして、この省察のすべてを紙の上に記すのです。が、それらはあの言葉の下品さゆえにしばしば凡庸なものですし、また、ある文章の途中でまったく愚直に登場してくるために、かなり滑稽な感じを帯びてしまいます。文章の途中で定義を下し、説明をする必要から用いられる「……にふさわしい」等の言い回しが、そうした省察になにか重々しい感じをあたえるので、それだけ省察全体としては滑稽になるのです。たとえば『シャペール大佐』のなかで、「代訴人に生まれつきのものである大胆さ、代訴人に生まれつきのものである疑念」が何度も繰り返して問題になっていきます。また、なにか説明をする必要があるとき、バルザックは勿体ぶつたりしないで、ざつとばらんに「こんなわけだからだ」と書き、そのあとに延々と一章つづくのです。同様に、彼には、ぼくらの知らねば

ならぬことを、要約した叙述のなかで、風通しのわるいかたちで断定的に語っているところがいくつもあります。「結婚二カ月目からダヴィッドはすでに中庭の奥の小屋で大部分の時間を過ごし、その小さな一部屋で印刷用のローラーを鑄造していた。アングレームに帰って三カ月後……」〔幻滅〕第三章 部第四章

しかし、まさしくこうした全体が、バルザックの好きなひとたちには気に入るのです。「……」バルザック好き！ だれかが好きだということとはなになのかを定義することがあれば好きだったサント・ブーヴは、このことについて、おみごとな一節を書くべきだったところです。というのは、ほかの小説家の場合は、その小説家が好きだということはその小説家に従っているという状態においてであつて、まるで自分より偉大で純粹なだけから真理を学ぶように、トルストイならトルストイから真理を受けとります。ところがバルザックの場合、その下品な点については隅々まで知っている、はじめはそういう下品さに尻ごみしたこともよくあつた。だがやがて彼のことが好きになりはじめ、すると、いかにもバルザックそのひとであるそうした素朴さに微笑を投げかけるようになる。優しさといじり合つて区別のつかぬような、ごくわずかの皮肉をもつて、彼を愛するようになるのです。彼の奇癖や偏狭さに通じ、しかもそれらが彼のつよい特徴をなしているがゆえに、そうした奇癖や偏狭さを好むのです。

バルザックが未整理な文体をいくつかの面でそのままにしてあるので、まるで、彼は作中人物の言葉づかいを客観化しようとは努めなかったのだ、あるいは、客観化したときも、その特殊な点をたえず指摘しようとする気持を抑えきれなかったのだと思うことができ

るみたいです。ところが、じつはその正反對なのです。歴史的・芸術的、等々のいろいろな見解を素材に並べていたその同じひとが、もっとも深い構想を隠し、作中人物の言葉づかいの描写の真実がおのずから語りだされてくるのにまかせているのですし、しかもそのやり方がじつに精妙なので、もしかしたらその真実は読者に見落されてしまうかもしれない、それでも彼はその真実にとくに注意を促そうとはしないのです。〔……〕

《ほう》とリュシヤンは思った、《この男、ブイヨット遊びを知っているな》とか、《とちめられたぞー》とか、《なんてまた、アラビア人みたいな性質なんだ！》とか、《リュシヤンは内心ひとりごちた、〔こいつを一つかっいでやろう〕（……）》というような傍白においてさえ、リュシヤン・ド・リュバンブレは、いかにもヴォートランの氣に入りそうな下品な陽気さ、無教養な若者の匂いを発散させています。そして事実、リュシヤン・ド・リュバンブレを愛したのはヴォートランひとりではなかった。オスカー・ワイルドが——人生の悲しい運命にはこぼれて、ワイルドはやがては、書物がぼくらにさした苦悩よりはもっと悲痛な苦悩のあることを学ぶにいたるのですが——そのワイルドが、初期のころ（というのはつまり、「テームズ河に霧が立ちこめるようになったのは湖畔詩人のころからにすぎない」と言っていたところです）「ぼくの生涯最大の痛恨事、だつて？『浮かれ女盛衰記』のなかでリュシヤン・ド・リュバンブレが死んだことさ」と言っているのですから。

こうして、バルザックの《四部作》のこの第一部の最終場面では（《四部作》という形容を用いたのは、バルザックでは小説がそのまま独立した一単位となるのが稀だからです。一篇の小説がひとつ

の部分をやけもつにすぎぬような運作^{イナ}によって、全体としての小説が構成されるのです。）単語のひとつひとつ、しぐさのひとつひとつに、バルザックのほうからは読者に知らせることをしない裏面があり、そうした裏面は讃嘆すべき深さを帯びています。それらは、きわめて特殊な心理、バルザックを除いてはこれまでなんびとによっても語られたことのない心理に属するものなので、それらを明確に指示するのは微妙な点があつてかなりむづかしい。しかし、ヴォートランが見知らぬリュシヤンを路上でひきとめる、ですからヴォートランはただその容貌に関心をそのかされただけらしいのですが、そのときのやり方にはじまり、リュシヤンの腕をとるとき意図せざるしぐさ、等々に至るまで、一切が、人生におけるふたりの人間のあいだの支配・被支配および結合についてのいろいろな理論のもつ、常識とはじつに異なる、しかしじつに明確な意味を明かしているのではないでしょうか。その意味についての想いを、偽の僧会員は、口には出さず、リュシヤンの眼に、そしておそらくは自身自身の眼に、くつきりと彩ってゆくのです。紙を食べるという奇癖をもつ男についての余談もまた、ヴォートランやその同類たちすべての性格上の驚くべき特徴、かれらのお氣に入りの理論のひとつ、かれらが自分の秘密から洩らしたごくわずかなものではないでしょうが。しかし、異論の余地なくもっともすばらしいのは、このふたりの旅人がラスティニヤックの屋敷の廃墟のまえを通りかかるみごとな条りです。ぼくはそれを同性愛の『オランピオの悲しみ』と名づけています。「彼はすべてをもう一度見たかった、泉のそばの池を」（『オランピオの悲しみ』第十三行）だれでも知っていることですが、『ゴリオ爺さん』のなかで、ヴォートランは、いまリュシヤン・ド・リュバンブレ

レの上に仕掛けているようなと同じ支配計画を、ヴォーケール館でラスティニャックの上に仕掛けて失敗していました。彼の計画は失敗しましたが、それでもラスティニャックは彼の生き方とひどくかわりをもっていました。のちにラスティニャックがリュシヤン・ド・リュバンブレに悪意を抱くと、仮装をしたヴォートランはヴォーケール館時代のことをいくつか彼に想い起こさせて、リュシヤンを庇護するように彼に強いるのですし、リュシヤンの死後にもラスティニャックは何度もひとをやつてヴォートランを暗い裏通りに呼びださせるでしょう。

こうした効果は、同じ人物たちをいろいろな小説のなかに引き留めておいたバルザックのあのみごとな発明のおかげがなければ、まづありえなかつたでしょう。そんなわけで、作品の本題から切りはなされた一条の光線が、あるひとりの人生の上をかすめると、その憂鬱で濁つた明るさで、あのドルドーニユの小さな貴族屋敷とふたりの旅人の歩みの停止とに触れることになるのです。作中人物たちに名前をそのまま残しておいてやるというこの事柄をサント・ブーヴはまったく理解しませんでした。こんなふうと言っているのですから、——「こうした意図から、彼はついには、この上なく誤っておりしかもこの上なく利得に反した考えを抱くようになった。つまり同じ人物たちをある小説から他の小説へとたえず再登場させようという着想である。小説がひとを惹きつける源をなす意想外の魅力を、これほど害するものはない。」〔同時代作〕
〔家の肖像〕

サント・ブーヴがここで見そこなつたものこそ、バルザックの天才的着想なのです。おそらくは、彼もすぐさまこの考えを思いついたわけではなかつた、そう言えるかもしれません。雄大なる連作群

のうちのる部分は、じつは、あとになってからその連作へと結びつけられたにすぎない、そんなこともありましよう。だからといって、なんでしょう、かまわないじゃありませんか？『聖金曜日の魅惑』はヴグダナーが『バルジファル』をつくらうと思ひつづめに書いて、あとで『バルジファル』のなかに挿入された曲です。しかし、あとから追加され、あのような美が嵌めこまれ、すると天才が自作のはなれた部分のあいだにだしぬけに新しい関係を認める、それまではなれていた部分が結びつき、生命をもち、もはや切りはなすことができなくなる、——それこそは、その天才のもっともみごとな直観に属することではないでしょうか？（……）

サント・ブーヴのこのほかの批判も、劣らず筋の通らぬものです。バルザックには不幸にして「文体の愉悅」が欠けていると咎めてから、趣味に欠点があるのだと責めるのは、バルザックについては真実すぎるほどのことですが、例としてサント・ブーヴが、「これらの「老嬢たち」はすべて、ちょうど植物の毛細管を想わせるように町のあちこちに居を構えて、葉が露を求めるときのような渴望をもつて、どのような世帯の噂や秘密も吸い上げ、そして、まるで木の葉が吸収したみずみずしさを茎に伝えるように、そういう噂や秘密をトルーベール師に送り、伝達するのであった」〔「トルーベール」の司祭〕という一文を引用するとなると、これは、思考が文体を鍍直し統一して、文章がたつぷりと練り上げられている、すばらしい出来栄を見せた、しかもバルザックの作品にとてもたくさん見つかる節に属するものなのです。（……）バルザックがご婦人どもの、もはや若さを失いはじめた（つまり「三十女」の）弱さにへつらつたのが世に受けた理由だ、サント・ブーヴはあえてそままで言います。「アンリ四世